



© Yuki Nakase

Theatre as a Community Space: The Drawings of Frandy Jean at the Theatre for the New City

紙と鉛筆、最後の時代50年の先へ

第87回アカデミー賞授賞式のテレビ中継の中で、昨年11月にアカデミー名誉賞を受賞された宮崎駿監督の受賞スピーチの一部が放映されました。「紙と鉛筆とフィルムの、最後の時代50年に、私がつき合えたことだと思います。」という監督の日本語が聞こえたとき、私が今なにに対してもがいているのかがはっきりしました。変わっていく時代の中で、私は紙と鉛筆をどのように生かすべきなのか自分なりの答えを探っていたのです。すべてがデジタル化しつつある仕事環境の変化に、照明家はどのように向き合っていくのがよいのか考えてみました。

私が日本で照明デザインを始めたとき、先輩から教わったのは手書きの図面制作でした。渡米して進学したニューヨーク大学大学院の照明家育成コースでも、手書きの図面制作から訓練が始まりました。しかし、現在私が請け負う照明業務で手書きは求められていません。AutoCADまたはVectorworksを使用して三次元図面を製作し、Cinema4DとPhotoshopによる三次元レンダリングを行い、Vectorworksによる二次元の照明図面を作成し、Lightwrightでパッチ表を起こします。照明デザインをクライアントに提案・提出する際、また施工業者と情報交換する際、ほとんどがインターネットを介したデータ交換であるため、以上の流れをコンピュータで行うことが不可欠です。もちろん、手書きの媒体をスキャンしてデータ化することも可能ですが、費用対効果・時間対効果が高い場合と抽象的なアプローチが求められている場合のみ許される選択でしょう。

しかし、コンピュータでのみ構築された照明デザインは、プレゼンテーションとして最高の出来栄かもしれませんが、実際に現場で光が再現されたとき、何か欠けていることに気が付きます。それは、手書きのスケッチでのみ得られる意向と思索の痕跡です。コンピュータのみで構築されたデザインを一般人が腕を横に伸ばす動作と例えるなら、手書きのスケッチを基に製図されたデザインはバレリーナが同じ動作をしたときに見える指先の延長に続く力です。照明図面はデザインを正確に伝える目的を果たすと同時に思考過程の一部であり、また商品となるのは図面ではなく、あくまでも再現された光です。そしてなにより、手書きで試行錯誤したことは脳裏に焼き付き、何が目的でどこに器材を吊るのが明確となるため、現場での予期せぬ状況や変更にも素早く対応することができます。思想の組織化と提示に非常に長けているコンピュータですが、まだ人間の手と頭脳に取って代わるまでではなさそうです。

照明家であるかぎり、紙と鉛筆は捨てるべきではないというのが私の結論です。アシスタントとして照明デザイナーのもとで働く際は、紙と鉛筆を一体みさせて、コンピュータでデザイナーの発想を忠実にデータ化させることに必死になってもよいですが、デザインは手書きのスケッチを工程から外すべきではありません。手で描写すると想像力を刺激し、あれこれ思索することが許され、私が生きていくとを感じる瞬間です。